



Title	『古今和歌六帖標注』翻刻(二)
Author(s)	伊藤, 一男
Citation	語学文学, 36: 21-29
Issue Date	1998
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8349">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8349</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 『古今和歌六帖標注』翻刻(二)

伊藤 一男

○本稿は、『古今和歌六帖標注』翻刻(一)、『旭川国文』第一三  
号—一九九七年十一月発行—所収』に続くものである。

○翻刻の要領は概ね(一)にならうが、新たに以下の点を付け加える。

・ 出典を示す傍注は、文字の大きさを変えず、当該歌の後に、( )  
の中に入れて記した。

・ 版本では、主に歌の右肩に、略号で他出文献を掲げている。略  
号には傍線を付したが、それが何を指すかは、提要の校正書目  
一覧を参照されたい。なお、傍注の校異に記された略号には傍  
線は付さなかった。

・ 出典を示す傍記や頭注に掲げられた和歌などには、『万葉集』  
は旧国歌大観番号を、他には新編国歌大観番号を付すが、私家  
集については、『私家集大成』の歌番号とする。

電	霰	露	雑風	春風	雑月	漢渚	漢渚	天	潤月	初冬	駒牽	秋立日
景呂不	氷	志津久	雨	夏風	三月月	照月	照月	天	歳暮	神無月	長月	早秋
	火	霞	白雨	秋風	夕月夜	春月	春月		霜月	霜月	九日	織女
	煙	霧	寒雨	冬風	有明	夏月	夏月		神楽	神楽	秋尽	後朝
	塵	霜	夕多千	山下	夕暗	秋月	秋月		志波須	志波須	葉月	葉月
	雷鳴	雪	雲	嵐	星	冬月	冬月		仏名	仏名	十五夜	十五夜

## 『古今和歌六帖』第一

歳時

春立日	親月	元日	残雪	子日	若菜
白馬	仲春	弥生	三日	暮春	
初夏	更衣	卯月	卯花	神祭	早苗月
五日	菖蒲	皆尽月	祓	夏尽	

春立日 ありはらのもとたか〔筑前守棟梁男〕  
一年のうちには春はきにけりひと、せをこそとやいはん今年とや

いはん(古)春上(一)・朗(三)・後六(九八)

【頭】『後撰』雑一(二一〇〇)

ひるなれやみぞまがへつる月かけをけふとやいはんきのふと  
やいはん 躬恒

紀貫之〔先祖未詳〕

二 袖ひちて結びし水のこほれるを春立けふの風やとくらん

〈同(二)・新撰(二)・朗(七)〉

【頭】『万葉』十二(二九五三)

恋君吾哭涕白妙袖兼所漬為便母奈之

三 としのうちに春たつことをかすが野のわかなきへにも知にける哉

〈家(一六八三)・新朗(三三)・夫春一歳内立春(一八)〉

四 春たつといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさは見ゆらん

みふのたぐみね〔散位安綱男〕

〈拾春(二)・家(一二七・II二)・朗(八)・金玉(二)・卅(七一)〉

五 やま風にとくる氷のひまごとにうち出る波やはるの初花

〈古春上(二)・源当純・寛(二)・新万(二三九)・朗(一六)・金玉(五)〉

六 打のぼるさほの川辺の青柳のもえ出る春になりけるかな

〈方八(一四二三)・玉春上(八七)・夫春三柳(九七三五)〉

志貴皇子〔かぐみの王子とも。天智天皇皇子〕

七 いはそ、ぐたるひの上のさわらびのもえ出る春になりける哉

〈方八(一四一八)・新古春上(三三)・夫春三早蕨(八九〇)〉

【頭】『延喜神名帳』云「摂津国豊島郡垂水神社」

『袖中抄』卷三云「摂津と播磨とのさかひにたるみといふ所。

垂水と書り。岸よりえもいはぬ水出る故にたるみといふなり。

垂水の明神と申神おはす。此水の石の上におちか、れば、いはそ、ぐたるみとはいふ也云々」

八 春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

〈古春上(一一)・家(一三三)・II五・III五・IV一四)〉

九 かすが野のとぶ火の野守出てみよ今いくかありてわかなくつみてん

〈同(一八)よみ人しらず・新撰(二二五)〉

【頭】『和名抄』燈火類云「『説文』云、烽燧〔度布比〕辺有警則拳之」

『統紀』元明紀云「和銅五年正月壬辰、廢河内国高安烽、始置高見烽及大倭国春日烽、以通平城也」

一〇 はるやとき花やおそきと聞わかん鶯だにも鳴ずもあるかな

〈同(一〇)・新撰(一一三)〉

藤原言直〔従五位下安繩男〕

一一 今さらに雪ふらめやもかげろふきろひのもゆる春ひべと成なりにし物を  
〈万十（一八三五）・新古春上（二二）〉・『赤人集』（I一三四・  
II一七）・古本『人丸集』（II二〇・III一・III二六）

一二 鶯の冬ごもりしてうめる子は春のむつきラカヌの中にこそなけ

〈夫春二鶯（三七七）〉

【頭】『和名抄』衣服類云「孫愔曰襜褕〔和名無豆岐〕、小兒被也」

ついたちの日

そせい法師〔良峯宗貞男〕

一三 あら玉の年立かへるあしたよりまたる、ものは鶯の声

〈拾春（五）・朗（七二）・卅（四九）〉には家持の歌とす。誤れり。

一四 昨日こそ年はくれしかはる霞大かすがの山和にはや立ぬらんにけり

〈万十（一八四三）・拾春（三）赤人・朗（七七）人丸・卅（二）・

家（I一四一・II二四）・古本『人丸集』（II一・III一四）・

古本『家持集』（I二一・II二二）

【頭】真淵云「万十はみな作者しられぬうた也。赤人と『拾遺』に有はひがことぞ。又赤人はやまべ氏にて山部と書。山の辺は別なるを、『古今』真名序に誤れり」

此「きのふこそ」のうた、真淵すでにいはいはれしごとく、万十の作者不知を正しとすべし。『拾遺』に「赤人」と有により『赤人集』に加へ、『朗詠』に「人丸」とあるによりて『人丸集』

に入れたるなるべし。『家持集』にさへ入れたる、誤甚しといふべし。

一五 きのふよりのちを拾家をばしらず百年の春の始はけふにぞ有ける

〈拾雜賀（一一五九）・家（I一三九）〉

【頭】『拾遺』『家集』、「をち」とあるにしたがふべし。「をち」は、俗に以前といふ意なり。のちにてはうたの意きこえず。

一六 あたらしくあくることとしかよを拾家ひをも、とせのはるのはじめと鶯ぞなく

〈雲賀（八八二）・家（貫之集（二二八）・風賀（二二六九）〉

一七 よ大しの山和みねのしら雪いつきえてけふき拾家金は霞のたちかはるらん

〈拾春（四）・家（二二二）・金玉（三三）〉

のこりの雪

一八 梅がえになきてうつろふ鶯のはね白たへにあわ雪ぞふる

〈万十（一八四〇）・新古春上（三三〇）・『赤人集』（I一三九・II二二二）

【頭】宣長云「あわ雪、たゞ雪のこと也。『万葉』に数しらず多くよめり。皆しかり。そのさまの沫に似たる故にいふ也」

貫之

一九 霞たつこのめもはるの雪ふれば花なき里もはなぞ散ける

〔古春上(九)〕

【頭】『後撰』恋一(五四四)

よみ人しらず

このめはる春の山田をうちかへしおもひやみにし人ぞ恋しき

おほしかふちのみつね〔先祖未詳〕

二〇 春たちて猶ふる雪は梅の花咲ほどもなくちるかと思ふ

〔拾春(八)・家(一五七・II四〇・III一六〇・IV三八五・V八九)〕

あか人

二一 うちなびき春さりくらししかすがに雨雲きりあひ雪はふりつ、

〔万十(一八三三)・家(一一一九・II三三)〕

笠朝臣金村

【頭】『万葉』四(五四三)  
安蘇々二破且者雖知之加須我仁黙得不在者云云

貫之

二二 はる霞立よらねばやみよしの、山に今さへ雪のふるらん

〔続古春上(九)・家(一二〇一)〕

家持〔大納言旅人男〕

二三 うちきらし雪はふりつ、しかすがに我家の園に鶯ぞなく

〔万八(一四四)・後春上(三三三)よみ人しらず・拾春(一一)〕

河御幸(七五九)・夫春二篇(三七五)〕

三四 年たてば花てふべくもあらなくに春今更に雪のふるらん

〔貫之集(一三五)〕

【頭】「うちきらし」と「年たてば」との歌の間に、第六帖

に出たる鶯のうた十首まぎれ入たり。そは、「打きらし」の歌は鶯をよめる歌なれば、それにひかれてふと誤りくはへたるなるべし。されど、またく重複なれば、今、意をもてはぶきたり。

三五 山のはに鶯なきて打なびきはると思へど雪はふりつ、

〔万十(一八三七)・風春上(四五)人丸・『赤人集』(I一三六・II一九・II二三九)〕

子日

大伴やかもち

三六 初春のはつねのけふの玉はゞき手にとるからにゆらく玉のを

〔万廿(四四九三)・新古賀(七〇八)よみ人しらず・夫春一(一六二)〕

【頭】『類聚国史』歳時部云「平城天皇大同三年正月戊子、

曲宴賜三五位已上衣被云云。これや子日宴のはじめなるべき。また『文徳実録』云「天安元年春正月乙丑云々、昔者上月之中必有此事・時謂之子日態云々」。こゝに「上月」と

あるは正月の事也。「上」「正」、音通ずる例、『易繫辞下疏』

にあり。さて、今のごとくに松をひくことは、『菅家文章』云、「予亦嘗聞于故老曰、上陽子日、野遊厭老、其事如何、

倚松根以摩腰、習風霜之難犯也云々」とみゆ。「玉はゞ

き」のこと、『童蒙抄』をはじめ、諸抄にみゆ。猶くはしき事は、師の『万葉攻證』にいはれたるをみるべし。

つらゆき

三七 千年てふ小松ひきつ、春の野の遠きもしらず我は来にけり  
〈家〉(I五二二)〈

伊勢〔伊勢守藤原継蔭女〕

三八 おふるより歳さだまれる松なれば久しきものと誰か見ざらん  
〈新後拾慶賀(一五五〇)・家〉(I七六・II七三・III七四)〈

みつね

三九 ねたくわれ子の日の松にならましをあなうらやまし人にひかる、

〈家〉(I九七・II一・III一・IV三四八・V三二)〈

貫之

四〇 おほつかなけふはねのびかあまならば海松をしそひくべかりける  
〈土〉(三五)・河濤標(一二九一)〈

【頭】『栄花物語』殿上花見巻(三六三)云「子日に、山菅

を手まさぐりして、

おほつかなけふはねのびを山すげのひきたがへてもいのりつるかな」

『続古今』賀(I八九九)

惠慶法師

うごきなさいはほにねざすうみ松の千とせをたれに波のよすらん

よみ人しらす

『夫木』雜八崎(一二二一三六)  
はるかなるねのびがさきにすむあまはうみ松をのみひきやすらん

四一 春がすみたなびく松のとしあらばいづれの春かのべにござらん  
〈家〉(I九一)〈

たゞみね

四二 子の日する野べに小松のなかりせば千世のためしに何をひかまし

〈拾春(二三)・家〉(IV一六七)・金玉(八)・『忠見集』(I八五・II五六)・朗(三六)・卅(一〇八)〈

わかな

【頭】『荆楚歲時記』云「正月七日為人日以七種菜為羹剪糸為人云云」

『大神宮儀式帳』云「正月七日新菜御羹作奉大神宮并荒祭宮供奉云云」

赤人

四三 春た、は若菜つまんとしめし野にきのふもけふも雪は降つ、  
〈万八(一四二七)・新古春上(一一)・新撰(二三)・家〉(I

二・I二・II三五四)・朗(三六)・卅(二)・夫春(二八四)〱  
【頭】『万葉』十八(四〇七九) 家持

美之麻野尔可須美多奈比伎之可須我尔伎乃敷毛家布毛由伎波敷里都追

四四 ゆきてみぬ人もしのべとと春の野に家持ヲカスのかたみにつめる若菜なり  
つらゆき

〔新古春上(一四)・家(I三・II二)・金玉(一〇)・朗(三七)・卅(一二)〕

【頭】『和名抄』竹器類云『四声字苑』云箆箆〔漢語抄〕云賀多美。小籠也。』

仁和のみかとの御歌〔仁明帝皇子〕

四五 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふりつ、

〔古春上(二二)・新撰(二九)・新朗(三二)〕

四六 かつが野はるののの若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行らん

〔同(二二)貫之・新撰(三一)〕

四七 川かみにあらふわかなのながれても君さてもがあたりのせにこそよ  
らめ

〔万十一(二八三八)・古本『人丸集』(II四九四)〕

四八 若菜つむわれを人みば朝みどりのべの霞もと立家かくれなむ  
つらゆき  
〔家(I六八)〕

四九 国すらのわかなたまむとしめし野のしばわれをおほせわかせイ、エく君を思ふ此比

〔万十(二九一九)・『赤人集』(I二〇二・II八三)・袖(七六五)〕

【頭】『書紀』神武紀云「亦有尾而披磐石而出者、天皇問之曰、汝何人、对曰、臣是磐排别之子也、此則吉野国樫部始祖也」

〔応神紀〕云「十九年冬十月戊戌幸吉野宮時、国樫人来朝之〔中略〕献土毛云々」

あをうま

【頭】『月令』云「孟春之月、天子居青陽左介、乘鸞路駕倉龍云云」

〔文徳実録〕云「仁寿二年春二月甲戌、幸豊楽院以覽青馬、助陽氣也云云」

こ、には二月青馬を見給ふとあり。今と異也。同書「齊衡三年春正月辛未、帝御南殿、觀青馬云云」。これより以下、みな正月也。猶、青馬の事は『玉かつま』にくはしくみえたり。

五〇 水鳥の鴨のはの色の青馬をけふみる人は限りなしてとふ  
家持  
〔万廿(四四九四)〕

なかのはる

みつね

五六

ちる花にせきとめらる、山河のふかくも春のなりにける哉

五一 はかなくて春は過にけり花の盛はすぎがてにせよ

〈家〉(I五八・III一六一・V九〇)〈

〈詞春(四四)・葉春下(七七)・新朗(四四)〉

【頭】『和歌一字抄』(一〇〇四)

顕季卿

五七

まだ咲ぬ花も山べにあるべきを心もとなく過る春かな

わがこゝろ春の山べにあくがれて花ゆゑ人にうらみられぬる

【頭】『新撰字鏡』云「忙怕(急務也。己々呂毛止奈加留)」「伊勢物語」(八三段)云「おほみきたまひ、ろくたまはんとてえつかはさゞりけり。この右馬頭心もとながりて云々」

五二 わが心はるの山べにあくがれてながくし日をけふもくらしつ

〈新古春上(八一)貫之・家〉(『躬恒集』I一四八・II五九・III四七・V七三)・亭(一四)みつね

III四七・V七三)・亭(一四)みつね

『土佐日記』(承平五年二月九日)云「九日、こゝろもとなきに、あけぬからふねをひきてのほれども云々」

忠峯

みかの日

五三 春は猶われにてしりぬ花ざかり心のどけき人はあらじな

〈拾春(四三)・家〉(I二八・II六六・III二・IV一六八)・朗(二六)・卅(八二)〈

【頭】上巳禊祓の事、後漢の郭虞よりおこれりといふは俗説也。祓除の事は、『周礼』にみゆ。そのふるきことしるべし。又上巳を用ひずして、三日をもちふるは、『宋書』礼志に、「自魏以後、但用三日、不レ以巳也」とあり。これや始めなるべき。

朗(二六)・卅(八二)〈

つらゆき

五四 鶯の花ふみしだく木のもとはいたく雪ふる春べなりけり

〈家〉(I二〇四)・代春下(四二二)〈

忠峯

五八

三千歳よへて家になるてふも、の今年より花咲春なりにける哉になりぞしあひにける哉にける拾

そせい

五五 いつまでか野べに心にあくがれん花しちらずは千世もへぬべし

〈古春下(九六)・家〉(I一四・II二三)〈

〈拾賀(二八八)・同抄(一八四)みつね・亭(六)是則・家〉(I四八)・『是則集』(六)・朗(四四)みつね

やよひ

【頭】『漢武内伝』云「僊桃七顆、大如鴨卵、形円青色以呈王母、王母以四顆与帝(中略)帝曰、欲植之、母曰、



此桃三千年一生<sup>レ</sup>実、中夏地薄種<sup>レ</sup>之不生、帝乃止<sup>レ</sup>」

みつね

五九 君がため我をる花は春遠くちとせを三たび有つ、ぞ咲

〔貫之集〕(I一七六)・夫春五(一七六四)〕

六二 つれく<sup>なほもせて</sup>と花を見つ、ぞ暮しつるけふをし春のかぎりとおも

へば

〔新後拾春下(一六二)・代春下(四九七)・古本集(II三〇一)〕

六〇 唐人の船をうかべてあそびけるけふぞわがせこ花かづらせよ

〔家持宅宴三月三日 工〕 やかもち

〔万十九(四一五三)・新古春下(一五一)・新朗(四〇)・袖(二六〇)・夫春五(一七四七)〕

六三 声たて、なげや鶯ひと、せにふた、びとだに來べき春かは

〔古春下(一三二)・寛(四)・新万(二四一)・新撰(一一九)・家(I四・I八)〕

藤原おき風〔相模掾道成男〕

〔頭〕『袖中抄』卷三に「三月三日、曲水宴とて盃を水にな

がす事こそあれ、ふねにのりてあそぶ事は聞えずと人々おほ

めくに、其證どもありとて、『文集』開成二年三月三日の文

をひけり。されど、開成二年は吾朝の承和四年に当れり。家

持のうたは、天平勝宝二年三月也。されば、八十年ばかり先

輩のうたの注に、おくれたる人の文をひくべきことかは。今

按ずるに、『洛陽伽藍記』卷一云「高祖於台上造清涼殿、

世宗於海内作蓬萊山、山上有僊人館、上有釣台殿并

作虹蜺閣、乘虚來往至於三月禊日季秋九辰、帝駕龍舟

鷁首、遊其上云云」とみゆ。これや、いさ、かより所を

えたりといふべき歟。

六四 花もみなちりぬる宿はゆく春のふるさと、こそ成ぬべらなれ

〔拾春(七七)貫之・新撰(一一五)・金玉(二二)・朗(五七)ともに貫之〕

そせい〔貫之 藏〕

つらゆき

六五 はなのもと立ことうくもなりぬるか春はけふをし限りとおも

へば

〔頭〕『業平集』(I五・II六五・III五・IV四)

ぬれつつぞしひてをりつる藤の花はるはけふをしかぎりとお

もへば

春のはて

貫之

六一 ゆくはるのたそがれ時になりぬれば鶯の音もくれぬべらなり

〔家(I四二七)〕

六六 ちる花の下にきてこそ暮はつる春のをしさも増るべらなれ

六七 花見つゝをしむかひなくけふくれて外の春とや明日はなりな  
ん

〔亭〕(三九)よみ人しらす・雲春下(二七八)貫之・新朗(五  
〇)貫之